平成 25 年度 東京都内湾水生生物調査 5 月付着動物調査 速報

●実施状況

平成 25 年 5 月 22 日に付着動物調査を実施した。例年は 10 月初旬に行われていたが、秋季では付着動物が落下していしまうため、今年度は落下する前に調査を行うこととした。天気は晴れで、気温 21. $1\sim24$. 2° C、風速 1. $6\sim2$. 2 m/s で弱い南東の風が吹いていた。当日は中潮で、8 時 51 分干潮、15 時 25 分満潮であった(東京都港湾局のデータ)。各地点の概況を下表に示す。

2013/5/22	中央防波堤外側(その 2)東側		13 号地船着場	
調査時間帯	9:40~11:05		11:38~12:40	
水深(m)	4.8		6.5	
天候	晴れ		晴れ	
気温	21.1		24.2	
風向/風速(m/s)	SE/2.2		SE/1.6	
波浪(m)	0.1		<0.1	
水色	緑色·濃(暗)		褐色·濃(暗)	
透明度(m)	3.2		0.6	
観測層	上層	下層	上層	下層
水温(℃)	22.3	20.9	23.8	20.2
塩分	17.6	30.6	23.9	30.2
pН	8.11	8.06	8.81	8.04
DO(mg/L)	6.93	3.54	17.1	3.84
臭気	無し	無し	無し	無し
備考			当日付近ではヘテロシグマ属主体の赤潮が発生 し、透明度が 1m未満であった。	

観測層:上層(0m)・下層(海底面-1m)、潮汐時刻:東京都港湾局のデータ

●調査地点の状況



●観察結果の概要

○ 中央防波堤外側(その2)東側

付着している生物の量は全体的に少なく、海底にはイガイ類の死殻が堆積していた。

被度(基盤を覆う面積比)が比較的高かった種類は、上方からイワフジツボ、ムラサキイガイ、 カンザシゴカイ科、カタユウレイボヤ、多毛類の泥巣(泥分を主体としたもの)などであった。

ムラサキイガイは潮間帯(AP+1.3m)から海底にむかい、高い被度で出現し始め、新規加入個体がマット状に広がっていた。また、深くなるに従い、新規個体は少なくなっていた。潮下帯(AP-1.1m ~-3.0m)にかけてはカタユウレイボヤが卓越し、他の生物の付着は少なかった。

潮下帯(AP-3.0m)からは多毛類の泥巣が卓越していた。海底は、イガイ類の貝殻や多毛類の棲管の脱落したもの、カニの死殻などが散在していたが、嫌気性バクテリアはみられなかった。

○ 13 号地船着場

付着している生物の量は、中央防波堤と同様に全体的に少なかった。鉛直的な分布も中央防波 堤とほぼ同じで、生物の種類数や量は、水深の浅い側では比較的多かったものの、下方では少な かった。

被度が比較的高かった種類は、上方からイワフジツボ、カンザシゴカイ科の棲管(石灰質で生死不明)、カタユウレイボヤ、多毛類の棲管(泥分を主体としたもの)であった。潮下帯(AP-0.8m~-3.8m)でカタユウレイボヤが卓越し、他の生物が付着できないほど覆っていた。移動性のイボニシ、レイシガイが出現したが、中層にカタユウレイボヤが卓越した為か、上層と下層に別れて生息していた。

海底には、イガイ類の貝殻や多毛類の棲管の脱落したものが堆積していたが、嫌気性バクテリアはみられなかった。



イワフジツボ 一中央防波堤ー 潮間帯の上部に優占した。小型のフジツボで、東京 内湾域で代表的な種である。



ムラサキイガイ - 中央防波堤ー 外来の付着性二枚貝で、港湾の防波堤等に高密度に 付着する。東京内湾域で代表的な付着生物である。



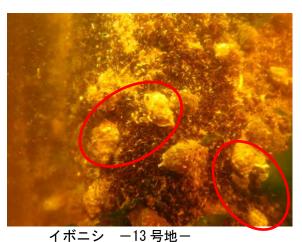
タテジマイソギンチャク 一中央防波堤ー 体の表面に縦縞があるためこの名前が付いた。全国 の潮間帯に普通に見られるイソギンチャクである。



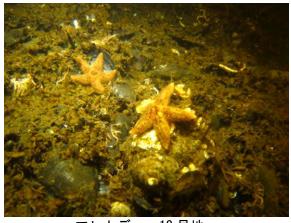
カタユウレイボヤ -中央防波堤-半透明の小型のホヤ類で、内湾域の岩礁や護岸等で 群体を作って基質に付着する。



イシガニ -13 号地-東京内湾域に普通に生息するやや大型のカニ。遊泳 脚を持ち移動能力が高い。食用となる。



潮間帯の岩礁に多い。殼の表面は丸いこぶ状の突起 で覆われる。肉食性の貝で、他の貝を補食する。



マヒトデ -13 号地-東京内湾域の砂泥底に普通に生息する。肉食性で主と 内湾の主として水深 10~20mにすむやや大型の巻貝 して海底の二枚貝を捕食する。



アカニシ -13 号地-で、殻口内は赤い。他の貝を捕食する。食用となる。